The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自伝的記憶の再構成的想起に関わる要因
Author(s)	田渕, 恵
Citation	生老病死の行動科学. 2008, 13, p. 53-62
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9036
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

展望論文

自伝的記憶の再構成的想起に関わる要因

The factors to affect the reconstruction of autobiographical memory

（大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程）田　渕　　恵

Abstract

Autobiographical memory is the memory of our experiences in daily life. The autobiographical memories are reconstructed when we recall them, so, they are not the truth we have experienced. The factors which affect the reconstruction are sex, age, emotion in recalling, and personality and so on. Also, the knowledge system about the self (the memory network about the self / self schema) is one of the important factors for the reconstruction in Network model or Schema model. The knowledge system about the self becomes activated unconsciously and automatically. So, it's important to consider the implicit variables in studying the factors to affect the reconstruction of autobiographical memory.

Key word: autobiographical memory, reconstruction, knowledge system about self

Ⅰ　はじめに

わたしたちは日常生活をおくる中で、様々な出来事を経験している。その経験には、非常に小さく些細なことから、非常に重要な出来事まで含まれている。そして何らかのきっかけで、それらの記憶は「思い出」として想起されたり、他者に語られたりする。このように、わたしたちが日常的に経験する、出来事に関する記憶の総体を、自伝的記憶（autobiographical memory）という。Tulving（1972）の分類に従えば、自伝的記憶は宣言的記憶として扱われ、事象の記憶であるエピソード記憶（episodic memory）の一種であり、時間や場所、そのときの感情などが含まれている。しかし、自伝的記憶には従来の長期記憶の理論では説明できない独自の現象が含まれており、多くの研究者が自伝的記憶研究に携わっている。

自伝的記憶は、1980 年以降に心理学の中で注目され始めた。しかしそれまでにおいても、人が自分の過去について語る「ライフストーリー」あるいは「ライフヒストリー」は、人類学や社会学の分野において貴重な資料として活用されていた（Ruth & Kenyon, 1996）。心理学において自伝的記憶をまず取り上げたのは、Galton と Freud である（Robinson, 1986）。Galton は、自らが研究参加者となり、ある一つの単語から連想される観念の内容やその鮮明度、潜時を検討した（Galton, 1907）。彼が用いたその方法は、のちに「手がかり語法」として用いられるようになり、現在でも自伝的記憶研究の中で頻繁に使われる手法となっている（Crovitz & Schiffman, 1974）。一方 Freud は、精神病患者の自伝的記憶に注目した。彼は、患者のヒステリー症状の背景には幼児期の性的虐待体験があると考えていたが、患者が思い出した記憶は「ファンタジー」であると考えるようになった（Freud　井村・小此木　監訳，1915）。これは、自伝的記憶の再構成的性質と深く関わる問題である。以降、心理学の分野で様々な自伝的記憶へのアプローチがなされるようになった。研究テーマとしては、自伝的記憶の構造に着目した研究（e.g., Brown & Schopflocher, 1998; Anderson & Conway,

1993; Barsalou, 1987; Conway & Bekerian, 1987）や、自己･社会･方向付け機能の研究（e.g., Wolike & Polo, 2001; Sakaki, 2004; Webster, 1997）、再構成的性質を取り上げた研究（e.g., Karney & Coombs, 2000; Conway & Ross, 1984; Lewinsohn & Rosenbaum, 1987）などが挙げられる。本論では、研究テーマとして自伝的記憶の再構成的性質を取り上げ、特に潜在的意識の働きと再構成メカニズムに着目したレビューを行い、自伝的記憶の再構成に潜在変数を盛り込んだ研究の可能性について考察する。

Ⅱ　自伝的記憶の再構成に関わる要因

何らかのきっかけがあって想起された自伝的記憶は、その人が経験した出来事そのもののコピーではなく、様々な要因によって歪められた結果の記憶である。例えばトラウマ体験者の記憶は多くの場合抑圧され、意識的に思い出せないことがあるが、回想された記憶が事実とは異なる偽りの記憶（false memory）であったことが判明し、社会問題に発展したことがあった（Woodward, 1994）。このように自伝的記憶は、態度や動機から選択的に想起されたり、忘却されたりすることにより、想起時に再構成されると言われる。自伝的記憶には 3 つの機能があり、自己像の一貫性の維持や自我同一性発達のための機能を「自己機能」、他者との社会的関係を形成するための機能を「社会機能」、将来に向けて自己を動機付けたり、自分の価値観や態度を確認するための機能を「指示機能」というが、こうした機能を果たす際、自伝的記憶が経験した出来事そのものである必要性はなく、むしろ、心理的に現実であることの方が重要であるとされる（Pillemer, 2003）。従って、想起された自伝的記憶を事実として見るのではなく再構成されたものとして理解し、再構成的想起に影響を与える要因やそのメカニズムを探ることは、自伝的記憶研究において非常に重要である。自伝的記憶の再構成的想起に影響を与える要因として、これまで様々な要因が検討されてきた。本論では特に、性別、年齢、想起時の気分状態、性格特性について取り上げる。

1．性別

性別においては、自伝的記憶の想起内容が、女性の方がより具体的でエピソード的に再構成されることが報告されている。例えば、Davis（1999）は、成人男性と成人女性にそれぞれ子供時代の記憶を想起してもらい、その想起内容に性差があるかどうか調べた。その結果、女性のほうが男性に比べて子供時代のことを詳細に想起し、また想起のスピードも速かった。また Pillemer, Wink, DiDonato, & Sanborn（2003）は、高齢の男女に日々の生活の内容を述べてもらい､その内容を記述するという実験を行った。その結果､女性のほうが男性に比べ、具体的でかつエピソード的、すなわち話の流れにそって記憶が想起されるということが示された。MacDonald, Uesiliana, & Hayne（2000）は、成人の最も古い記憶における性別の相違を調べた。その結果、女性による記憶の記述のほうが、男性によるものに比べてより多くの情報を含んでいた。これらの先行研究の結果は、自伝的記憶の再構成的想起に影響を与えていることを示している。

2．年齢

また年齢においては、想起内容が加齢と共に変化することが報告されている。 例えば Piolino, Desgranges, Benali, & Eustache（2002）は、半構造化された自伝的記憶質問紙を

用いて、自伝的記憶の意味的側面とエピソード的側面の両方を思い出す能力を調べ、意味的な部分は年齢に関係なく保たれるが、エピソード的な報告は加齢により減少することを明らかにしている。すなわち、想起時において、加齢に伴いエピソード的側面の再構成が抑えられる。Levine, Svoboda, Hay, Winocur, & Moscovitch（2002）も、高齢者は若年成人よりも、エピソード的な記憶を思い出さず、より特定の時間や場所に規定されない記憶を想起することを報告している。また Pasupathi（2001）は、加齢に伴って想起されるストーリーの一貫性が高まることを報告している。すなわち、高齢になるに伴って、より一貫した自伝的記憶へと再構成されるようになる。これらの原因としては、自伝的記憶を他者に表現するスキルが高齢になるに伴って発達するということや、自伝的記憶を他者に語る場合には聴き手の反応に左右されず語り方を変えることが少なくなることなどが考えられている。あるいは、自伝的記憶の再構成的方略が、加齢に伴って固定化するためと考えられている。これらの先行研究から、年齢が自伝的記憶の再構成的想起に与える影響が大きいことが分かる。

3．想起時の気分状態

性別や年齢といった属性以外の要因としては、自伝的記憶の想起時の気分状態が挙げられる。ネガティブな気分状態下では、自伝的記憶をネガティブな方向に再構成するため通常よりもネガティブな記憶を想起しやすいことは、記憶実験の分野で広く研究が行われてきた。例えば Nikendei, Dengler, Wiedemann & Pauli（2005）は、ネガティブな気分状態における、ネガティブ語の処理についての研究を行った。その結果、ネガティブな気分状態にある人は、そうでない人よりもよりネガティブ語を選択的に処理することが明らかになった。また Moritz, Glascher & Brassen（2005）は記憶実験の中で、抑うつ気分状態の参加者と健康的な気分状態の参加者の、記憶想起課題の成績を比較した。その結果、抑うつ気分の参加者は健康的な気分状態の参加者に比べて、感情的な気分状態を喚起しない課題の記憶想起成績は劣ったが、感情的な課題、特にネガティブな単語の想起においては、両者の成績にほぼ違いはなかった。これらの結果から、想起時の気分状態がネガティブである場合、想起内容もネガティブなものに再構成されることが分かる。

4．性格特性

また、性格特性も想起時の再構成に影響を与えることが報告されている。例えば Watson,&Clark（1992）は、性格特性と感情を伴う記憶の関係から、ポジティブな性格特性の人ほど日常的に経験する出来事に対してポジティブな想起をしていることを明らかにしている。また神谷・伊藤（2000）は、自伝的記憶の想起内容を性格特性により分析し、情緒不安定性や活動性の違いにより不快エピソードの数や特徴が異なることを報告している。Sanitioso, Kunda, & Fong（1990）は、外向性の強い性格特性の人と内向性の強い性格特性の人を対象にして、各特性を反映する自伝的記憶を想起するように求めた。すると、外向性の強い人は外向的な経験を、内向性の強い人は内向的な経験を、それぞれ速く想起することが見出された。これらの結果から、性格特性が異なると自伝的記憶の想起内容も異なって再構成されることが分かる。

5．時間的展望

自分の将来についての理想や、過去をどのように受け入れているかということも、自伝的記憶の再構成的想起内容に影響を与えることが指摘されている。こうした、ある時点における心理学的未来および過去に関する見解の総体を、時間的展望という（Lewin　猪股　訳，1951）。佐藤（2000）は、自伝的記憶の中の「過去の自分」が「未来の自分」を動機付けると同時に、「未来の自分」が「過去の自分」を選択的に想起し、過去を再解釈しているという、過去と未来の双方向モデルを提案している。佐藤（2000）は教職志望の強い学生の自伝的記憶内容を分析し、過去の教師に関する快エピソードが教職志望という未来の自分を動機付けていると同時に、教職志望という未来の自分によって教師に関する快エピソードが選択的に想起されていることを報告した。また白井（2001）は、未来によって方向付けられた現在が過去を意味づけるというモデルを提案した。こうした未来に対する個人の動機付けが、自伝的記憶を想起する際に及ぼす影響についても、自伝的記憶研究の中で検討されている。

Ⅲ　自伝的記憶の再構成メカニズム

自伝的記憶の再構成に関わる要因には以上のような個人特性が考えられているが、自己に関わる記憶の想起メカニズムや再構成的想起のメカニズムについては、認知心理学や精神分析学などの知見から様々な報告がなされている。本論では、特に記憶のネットワークモデルとスキーマモデルを取り上げる。

1．記憶のネットワークモデル

自己に関する記憶の体系的な知識構造に注目したモデルとして、記憶のネットワークモデルがある。Collins & Quillian（1969）は、人の知識構造は互いにリンクで結び付けられた階層的なネットワークをなしていると考えた。このモデルでは、関連する概念や性質がリンクで結びついており、より関連の強い概念はより近接している。そして、ある概念に接したり、ある概念を想起したりすると、その概念が活性化され、その活性化がリンクに沿って伝わっていく。そうして新たに活性化された概念は、次の活性化が生じやすくなり、想起されたり処理されやすくなったりする。このネットワークモデルを、Bower & Gilligan（1979）は自己についての記憶に適応した。自己に関する抽象化された特性（「よい」「親切」など）や、具体的行動（「高齢者が道を渡るのを助けた」など）がリンクによって結び付けられており、リンクに沿った活性化が起こると考えられる。すなわち、自己に関する何らかの記憶を想起する際、ネットワーク上の自己に関する概念がリンクに沿って活性化すると考えられる。

2．スキーマモデル

こうした記憶の知識構造を、スキーマ（schema）という概念で考えることもできる。スキーマの概念を最初に導入したのは、Bartlett（1932）である（Bartlett　宇津木・辻　訳，1983）。彼は、物語文を使った研究を行い、その人の持つ認知的な枠組みが再構成に重要な役割を果たすことを提唱した。具体的には、実験協力者が記憶した物語文の想起において、細部の特徴的な内容が鮮明に保持される一方、文章全体の表現に省略と簡略化が見られ、実験協力者の情報処理の枠組みに合った形で、物語の記憶が合理化され保持されていることを報告した。Bartlett はこうした実験協力者がそれぞれに持っていた認知的な枠組みをスキー

マと呼び、スキーマによって様々な経験の記憶は構造化され、それらの記憶を想起する際に内容が変容し、再構成が行われるとした。この考え方を自己概念に用いたMarkus（1977）は、自己についての知識構造もスキーマと呼べるものと考え、これを自己スキーマと名づけた。彼は自己スキーマを、「自己についての認知的概括物であり、過去経験から引き出され、個人の社会的経験の中に含まれる自己に関係した情報の処理を組織化し、導くもの」と定義し、スキーマの形成によって自己に関する情報が素早く処理されるとした。

この概念を基に、様々な記憶のスキーマモデルが考えられた。例えばRiskind（1989）は、ある特殊な状況が個人に起こったとき、個人の持つスキーマによる情報処理がなされるという考え方から、認知プライミング理論を提唱した。これは、何らかの感情が生み出される過去の出来事の経験により感情スキーマが形成され、以後の出来事がそのスキーマにより記憶されるという理論である。Macaulay, Ryan & Eich（1993）もこの考え方を用い、感情スキーマによって、個人の経験の記憶処理にバイアスがかかることを明らかにしている。またBeck（1971）は、スキーマが個人の経験のフィルターとして働くことを主張し、スキーマの概念を基にしたうつへのアプローチを行った。うつ状態の人はうつ的スキーマを形成しており、何らかの出来事が起こるとそのスキーマと一致した方法で記憶が選択的に記銘され、また解釈・想起される際にもそのスキーマと一致したものになるとした。うつ状態の人の自伝的記憶が、そうでない人のものと比較してネガティブなものになることは、Williams & Broadbent（1986）の研究以降注目されるようになり、様々な研究により結果が報告されている(Lemogne, Piolino, Friszer, Astrid, Nathalie & Roland, 2006)。これらの結果をスキーマモデルで考えるならば、ネガティブなスキーマにより記銘時・想起時に自伝的記憶がネガティブなものへと再構成されと解釈できる。特に、自伝的記憶は自己概念の形成において重要な役割を果たすことから（Conway,1990)、自己に関するスキーマは自伝的記憶の再構成的想起に影響を及ぼすことが考えられる。Teasdale, Lloyd & Hutton（1998）は、うつの人の自己の価値に関するスキーマモデルに注目し、そうしたスキーマが、記憶処理とその場のうつ的感情との相互作用により、変化することを提唱している。

Ⅳ　再構成に関わる潜在的要因の測定

上述した記憶のネットワークやスキーマの活性化は、潜在的なレベルにおいて自動的に行われる（Rehn & Naus, 1990)。つまり、何らかの出来事を経験し、それを記憶する時、人は個人特性として無意識に構造化された知識体系を用い、また想起時にも無意識に使用している。このように、自伝的記憶の再構成的メカニズムに着目すると、潜在的レベルの要因、特に潜在的に用いられる自己に関する知識体系が、再構成に関わる重要な要因となることが分かる。そこで、自伝的記憶の再構成に関わる潜在的要因を検討するため、それらを測定することが必要となる。

1．スキーマの測定

まず、スキーマの測定としては、自己概念の測定と類似した方法を用いる場合が多々見られる。例えば､いくつかの次元からなる性格特性について､その自己評価と重要度評価を基に、それを自己に関するスキーマ得点とする研究方法がある（北村，1991)。これは、ある次元の特性概念に自己がよく当てはまり、かつその次元を重要と捉えている場合、その特性概念

に関して自己スキーマを持つとする考え方(Markus, 1977)に基づくものである。この方法は、自己スキーマを測定するという意図が対象者に隠されているという点では、無意識に用いられる自己に関するスキーマを測定することができるが、顕在的自己評価を行うため、社会的望ましさといったバイアスを取り除くことは困難である。性格特性を自己スキーマと解釈し、それにより自伝的記憶の想起が異なることを指摘した研究もある（神谷・伊藤, 2000）が、顕在的に測定された指標を用いて、スキーマをどこまで測定できるかは疑問が残る。自動的に使用されるスキーマをより厳密に測定するためには、意識的に統制できる側面を可能な限り減らす必要があると考える。

2. Implicit Association Test（IAT）による測定

ここでは、ある対象物に対する潜在的態度を測定するものとして開発されたIAT（Implicit Association Test）による、自己に関するスキーマ測定の可能性について考察したい。IATとは、Greenwald & Banaji（1995）によって考案された、意識的に反応しない潜在的な態度を測定するプログラムである。「ある対になる事柄」と「対になる感情」の、反応の潜時を測定した結果を結びつきの強度として測定するように作成されている。この結びつきの強度により、対象物に対する自動的な処理が影響を受ける。顕在的な対象物への態度が、自己報告指標に影響しているのに対し、IATで測定された潜在的な対象物への態度は、行動や認知的な指標、意識的にコントロールできない非意図的側面に影響する（Shimizu & Pelham,2004)。スキーマは既知の経験から抽象化された一連の命題のネットワーク・イベントで、関連する概念の結びつきによる集合体（Rumelhart & Ortony, 1977）である。こうしたスキーマモデルに基づけば、IATで測定された事物に対する潜在的態度は、情報処理を行う際に自動的に用いられるスキーマの一種であると解釈することができる。IATを用いた研究では、潜在的な自己への態度を「自己」と「快」の連合強度で測定し、これを潜在的自尊心（implicit self-esteem）としている（Greenwald & Banaji, 1995)。IATで測定される潜在的自尊心と、自記式質問紙で測定される顕在的自尊心は、必ずしも一致するわけではなく、低い相関しか見られないことが報告されている（Greenwald & Farnham, 2000)。そのため、IATは潜在的自尊心を適切に測定しているのかという点や、IATで測定する「自己」と「快」の連語強度を、潜在的自尊心としてもよいのかという点について、疑問が挙がっている。スキーマモデルに基づいた自伝的記憶研究において、IATによる連合強度を変数として用いた研究はない。しかし、潜在的な「自己」と「快」の連合は、非意図的な認知や行動に関係することから、一種の自己に関するスキーマであると解釈できると考える。従って、自伝的記憶の再構成研究において、IATを用いた潜在的な要因の検討を今後行っていく必要があると考える。

Ⅴ. おわりに

IATの開発に代表されるように、近年、潜在的なレベルを検討することが注目されつつある。自伝的記憶の再構成的想起にも、潜在的レベルでの要因が影響すると言われながら、潜在変数との関連を調べた研究はほとんどなされてこなかった。自伝的記憶研究に積極的に潜在変数を取り入れていくことは、自伝的記憶の再構成メカニズムの解明に大いに寄与すると考えられる。本論では特に潜在的なスキーマについて取り上げたが、潜在的な個人特性につ

いても、再構成的想起に関る要因として検討して行く必要がある。更に、ここでは宣言的記憶として意識的に想起される自伝的記憶を取り上げたが、潜在変数に着目することで、例えばフラッシュバック現象のような無意識的に想起される自伝的記憶の側面のメカニズム解明にもつながると考えられる。

しかし、潜在変数を測定するテストについては妥当性について検討することが非常に難しく、本論で取り上げた IAT についても妥当性についての一貫した知見がまだ十分に得られていない（e.g. Nosek, Greenwald & Banaji, 2005; Gawronski, 2002; Banse, Seise & Zerbes, 2001）。自伝的記憶研究に潜在変数を用いる際は、妥当性についての慎重な検討が必要であり、今後の課題であると考える。

引用文献

Anderson, S. J., & Conway, M. A. 1993 Investigating the structure of autobiographical memories. *Journal of Experimental Psychology-Learning Memory and Cognition,* **19**(5), 1178-1196.

Banse, R., Seise, J., & Zerbes, N. 2001 Implicit attitudes towards homosexuality: Reliability, validity, and controllability of the IAT. *Zeitschrift Fur Experimentelle Psychologie*, **48**(2), 145-160.

Barsalou, L. W., & Hutchinson, J. W. 1987 Schema-based planning of events in consumer contexts. *Advances in Consumer Research*, **14,** 114-118.

Bartlett, F. C. 1932 Remembering: A study in experimental and social psychology. London: Cambridge University Press. 宇津木保・辻正三（訳） 1983 想起の心理学 誠信書房

Beck, A. T. 1971 Cognition, affect and psychopathology. *Archives of General Psychiatry*, **24,** 495-500.

Bower, G. H., & Gilligan, S. G. 1979 Remembering information related to ones-self. *Journal of Research in Personality*, **13**(4), 420-432.

Brown, N. R., & Schopflocher, D. 1998 Event clusters: An organization of personal events in autobiographical memory. *Psychological Science*, **9**(6), 470-475.

Collins, A. M., & Quillian, M. R. 1969 Retrieval time from semantic memory. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, **8**(2), 240-256.

Conway,M.A. 1990 Autobiographical Memory. An Introduction. Philadelphia, Open University Press.

Conway, M. A., & Bekerian, D. A. 1987 Organization in autobiographical memory. *Memory & Cognition*, **15**(29)**,** 119-132.

Conway, M., & Ross, M. 1984 Getting what you want by revising what you had. *Journal of Personality and Social Psychology*, **47**(4), 738-748.

Crovitz, H. F., & Schiffma.H. 1974 Frequency of episodic memories as a function of their age. *Bulletin of the Psychonomic Society*, **4**(5), 517-518.

Davis P. J., 1999 Gender differences in autobiographical memory for childhood emotional experiences. *Journal of Personality and Social Psychology*. **76**(3) 498-510.

Freud, S. 1915 Verdrangung. In Sigmund Freud Gesammelete Werke Bd. XIV. Frankfurt am Mein: S. Fischer Verlag GmbH. 井村恒郎・小此木啓吾（監訳）1970　フロイト著作集 6　自我論・不安本能論　人文書院　Pp.18-35,78-86.

Galton, F. 1907 Inquiries into human faculty and its development. 2nd. Ed. London; J. M. Dent & Sons. Pp.133-146.

Gawronski, B. 2002 What does the Implicit Association Test measure? A test of the convergent and discriminant validity of prejudice-related IATs. *Experimental Psychology*, **49**(3), 171-180.

Greenwald, A. G. & Banaji,M.R. 1995 Implicit social cognition: attitudes, self-esteem, and stereotypes. *Psychological Review*, **102**, 4-27.

Greenwald, A. G., & Farnham, S. D. 2000 Using the implicit association test to measure self-esteem and self-concept. *Journal of Personality and Social Psychology*, **79**(6), 1022-1038.

神谷俊次・伊藤美奈子　2000　自伝的記憶のパーソナリティ特性による分析　心理学研究，**71**(2), 96-104.

Karney, B. R., & Coombs, R. H. 2000 Memory bias in long term close relationships: Consistency or improvement? *Personality and Social Psychology Bulletin*, 26(8), 959-970.

北村英哉　1991　特性概念の可得性と自己スキーマが対人記憶に及ぼす効果　心理学研究，62(4), 221-228.

Lemogne, C., Piolino, P., Friszer, S., Astrid, C., Nathalie, G. B., Roland, J., et al. 2006 Episodic autobiographical memory in depression: Specificity, autonoetic consciousness, and self-perspective. *Consciousness and Cognition*, **15**(2), 258-268.

Levine, B., Svoboda, E., Hay, J. F., & Winocur, G. 2002 Aging and autobiographical memory: Dissociating episodic from semantic retrieval. *Psychology and Aging*, **17**(4), 677-689.

Lewin, K. 1951 Field theory in social science. In D. Cartwrite (Ed): New York. 猪股佐登留（訳）1979　社会科学における場の理論（増補版）　誠信書房 .

Lewinsohn, P. M. & Rosenbaum, M. 1987 Recall of parental behavior by acute depressives, remitted depressives, and nondepressives. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 611-619.

Macaulay, D., Rehn, L., & Eich, E. 1993 "Mood Dependence in Implicit and Explicit Memory." In P. Graf and M. E. J. Masson (eds.), Implicit Memory: New Directions, Development and Neuropsychology, Hillsdale, NJ: Erlbaum, Pp.75-94.

MacDonald, S., Uesiliana, K., & Hayne, H. 2000 Cross-cultural and gender differences in childhood amnesia. *Memory*, **8**(6), 365-376.

Markus, H. 1977 Self-schemata and processing information about self. *Journal of Personality and Social Psychology*, **35**(2), 63-78.

Moritz S, Glascher J, Brassen S, 2005 Investigation of mood-congruent false and true memory recognition in depression. *Depression and anxiety*. **21**(1), 9-17.

Nikendei C, Dengler W, Wiedemann G, Pauli P. 2005 Selective processing of pain-related word stimuli in subclinical depression as indicated by event-related brain potentials. *Biological Psychology*. **70**(1), 52-60.

Nosek, B. A., Greenwald, A. G., & Banaji, M. R. 2005 Understanding and using the Implicit Association Test: II. Method variables and construct validity. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**(2), 166-180.

Pasupathi, M. 2001 The social construction of the personal past and its implications for adult development. *Psychological Bulletin*, **127**(5), 651-672.

Pillemer, D.B. 2003 Directive functions of autobiographical memory: The guiding power of the specific episodes. *Memory*, **11,** 193-202.

Pillemer, D. B., Wink, P, DiDonato, T. E., & Sanborn, R. L. 2003 Gender differences in autobiographical memory styles of older adults *Memory*, **11**(6), 525-32.

Piolino, P., Desgranges, B., Benali, K., & Eustache, F. 2002 Episodic and semantic remote autobiographical memory in ageing. *Memory*, **10**(4), 239-257.

Rehn, L. P. & Naus, M. J. 1990 A memory model of emotion. In R. E. Ingram (Ed.) Contemporary psychological approaches to depression. Pp.23-35.

Riskind, J. H. 1989 The mediating mechanisms in mood and memory: A cognitive-priming formulation. *Journal of Social Behavior and Personality*, **4**,173-184.

Robinson, J. A. 1986 Autobiographical memory: A historical prologue. In D. C. Rubin (Ed.), Autobiographical memory. New York, NY: Cambrige University Press. Pp.19-24.

Rumelhart, D. E. & Ortony, A. 1977 The representation of knowledge in memory. In R. C. Anderson, R. J. Spiro & W. E. Montague (Ed.), Schooling and the acquisition of knowledge. Hillsdale, NJ; Erlbaum. Pp.99-135.

Ruth, J. E., & Kenyon, G. M. 1996 Introduction: Special issue on ageing, biography and practice. *Ageing and Society*, **16,** 653-657.

Sakaki, M. 2004 Structure of self-knowledge: Is self-concept represented independently of autobiographical memory? *International Journal of Psychology*, **39**(5-6), 322-322.

Sanitioso, R., Kunda, Z., & Fong, G.T. 1990 Motivated recruitment of autobiographical memories. *Journal of Personality and Social Psychology*, **59,** 229-241.

佐藤浩一　2000　思い出の中の教師－自伝的記憶の機能分析－群馬大学教育学部紀要　人文・社会学編，**49,** 357-378.

Shimizu, M., & Pelham, B. W. 2004 The unconscious cost of good fortune: Implicit and explicit self-esteem, positive life events, and health. *Health Psychology*, **23**(1), 101-105.

白井利明　2001　大学から社会への移行における時間的展望の再編成に関する追跡研究（Ⅲ）－大卒５年間における初期キャリアの形成過程－大阪教育大学紀要，**50**(1), 27-45.

Teasdale, J. D., Lloyd, C. A., & Hutton, J. M. 1998 Depressive thinking and dysfunctional schematic mental models. *British Journal of Clinical Psychology*, **37,** 247-257.

Tulving, E. 1972 Episodic and semantic memory. INE. Tulving & W. Donaldson (Eds.), *Organization of memory*. New York : Academic Press. Pp.381-403.

Watson, D., & Clark, L. A. 1992 Affects separable and inseparable -on the hierarchical arrangement of the negative affects. *Journal of Personality and Social Psychology*, **62**(3), 489-505.

Webster, 1997 The Reminiscence functions scale: A replication. *International Aging and Human Development*, **44,** 137-148.

Williams, J. M. G., & Broadbent, K. 1986 Autobiographical memory in suicide attempters. *Journal of Abnormal Psychology*, **95**(2), 144-149.

Woike, B. & Polo, M. 2001 Motive-related memories: Content, structures, and affect. *Journal of Personality*, **69,** 391-415.

Woodward, K.L. 1994 Was it real or memories? *Newsweek*, **14,** 58-59.